

(要約版)

南米南部メルコスール地域におけるマテ茶産業の現在

- ウルグアイにおけるブラジル産マテ茶の輸入・流通・消費の実態に関する研究 -

中沢 知史 (立命館大学)

1. 研究目的

本研究は、南米南部のメルコスール地域におけるマテ茶産業について、ウルグアイ東方共和国 (República Oriental del Uruguay・以下ウルグアイ) に焦点を当てることでその一端を明らかにしようとするものである。マテ茶は、アメリカ大陸に幅広く分布するモチノキのひとつ *Ilex paraguariensis* を原料とする伝統的な飲料であり、現在メルコスールを構成するウルグアイ、パラグアイ、アルゼンチン、ブラジルを中心に幅広く見られる文化である。

ウルグアイ人は、世界で最も多くのマテ茶を消費する国民である。他方、大消費地であるウルグアイは自国内でマテ茶を生産しておらず、周辺国、とりわけ陸路で国境を接する南部ブラジル諸州からの輸入に強く依存している。また、ウルグアイにおけるマテ茶に関する人文社会科学研究はさほど多くない。ウルグアイが自国でマテ茶を生産せず輸入に頼る理由は何か。なぜ文化的に親近性が高く同じスペイン語圏に属するアルゼンチンからでなくポルトガル語圏のブラジルから輸入しているのか。現在ウルグアイ人が消費するマテ茶はブラジルのどこでどのように生産され、どのような経路でウルグアイに輸出されて国内市場で流通しているのか。本研究は、マテ茶を消費する側であるウルグアイに着目し、消費者側の視点を導入することでこれまでのマテ茶研究の欠落を埋めるものである。本研究を通じウルグアイにおけるマテ茶文化の一側面が明らかになり、嗜好品研究の蓄積を厚くすることに貢献すると期待される。

2. 研究方法

本研究は、構想・予備調査 (2019 年後半～2020 年初)、国内における事前調査 (2020～2022 年度※コロナ禍の延期期間含む)、ウルグアイにおける現地調査 (2022 年度末) の三段階で構成される。構想・予備調査および事前調査段階では、先行研究や参考文献、インターネットで利用可能なデータの収集を行った。現地調査では、①ライブラリーワーク、②フィールドワーク、③インタビュー、④その他の 4 つの方法によりデータを収集した。

3. 研究成果

3-1. マテ茶の歴史

まず、マテ茶の歴史を辿ることにより、マテ茶が典型的な嗜好品であることが確認できた。すなわちマテ茶はまず南米大陸の先住民族が栄養補給の手段として、また医薬品として使用しており、さらに儀礼の対象ともなっていた。かかる先住民族の習慣がヨーロッパ人征服者たちに伝わり、商品作物として流通する過程で嗜好品の存在形態を帯びるようになった。

3-2. 社交の道具としてのマテ茶

マテ茶は、社交の道具としての側面も有する。マテ茶は伝統的に回し飲みされることで知られ、その際に独特の作法が存在する点がかねてから注目されてきた。これらの作法のなかには、現在でもウルグアイにおいて行われているものがあることが分かった。

3-3. ウルグアイにおけるマテ茶産業の現在

産業の観点から見た場合、ウルグアイは少なくともこの 140 年間、自国でマテ茶を生産せず、隣国のブラジルからの輸入に過度に依存する状態を続けてきた。もう一つの隣国でありマテ茶生産国であるアルゼンチンは保護主義的でありウルグアイ市場への自国産品の供給に関心を持っていない。また、ウルグアイ領内にマテ茶の原木が自生してはいるものの、地産地消へ向けた取り組みに目立った進展は見られない。結果として、慣れ親しんだ味のマテ茶を生産してくれるブラジルを頼る状況が続いている。

4. 結論および考察

本研究を通じて浮かび上がってきたのは、ウルグアイにおけるマテ茶消費の息の長さである。コロナ禍のなかでも消費自体は相変わらず旺盛で、社交の道具としての側面や、元来の味へのこだわりも長期的に持続している。他方で、これほどアイデンティティの重要な一角を成す物品をブラジルからの輸入に完全に依存している現状について、食料主権の観点から見直そうとする動きはまだ始まったばかりである。

本研究は、資金と時間面での限界により、ブラジルにおけるマテ茶の生産過程を調査するまでに至らなかった。また、研究計画の立案当初、マテ茶をめぐる南米南部の政治力学を描くことを想定していたものの、アルゼンチンの保護主義の影響をおぼろげに看取したのみで、ブラジル側の動きについては手つかずとなった。さらに、マテ茶の南米以外への広がりも今後の課題である。加えて、明治以降の日本とマテ茶とのかかわりについて、近年注目される入植者植民地主義論、あるいはセトラ・コロニアリズム論といわれる研究潮流のなかで捉え返す作業も射程に入ってくる。

今回得られた成果をもとに、今後さらに調査を深めていきたい。